

VIII おわりに

委員会ではしばしば、いったいわれわれは何をやっているのだろうか、という話題が出る。放送倫理と番組の向上に資するための第三者機関の役割とは何なのか、という問題である。委員一人ひとりが自問と自答を繰り返してもいる。

これまで2年余の活動をつづけてきて言えることは、放送局の不祥事や放送倫理違反が問題になるとき、そこには必ず組織構造上の問題がある、ということである。制作者個人の資質や技量に相違があることは、人間のやることである以上当たり前のことであり、むしろ問題はそうした個々人のヒューマン・エラーを誘発するような職場環境、無理な日程や人員配置、連絡・責任体制の不備等にある。

私たちはこれまでさまざまな不祥事を検証し、意見や見解を公表してきたが、起きたことの詳細を調査するだけでなく、そうした組織構造上の問題を見る視点を忘れないよう自戒してきた。これがおそらくは、個々の番組制作者の過誤や判断ミスを強調する見方とも、中身もわからないうちに結果だけを見て、あれこれいう見方とも違う意見や見解となって現われているだろう、と私たちは自負している。

しかし、このことは、私たちの眼力のよさを意味しない。実際、そんなことは全然ない。私たちが組織構造上の問題にこだわりつづける理由は、現在の放送局の仕組みを作り、番組を作り、放送しているのは、いま放送界で働いている放送人だからである。社員であれ、制作会社のスタッフであれ、その組織の構造のありようは、必ずその働き方と番組に反映されるはずである。

委員会は意見や見解を発表することで、いわば観客席から、チーム全体にエールを送ったり、プレーヤー一人ひとりの品定めしたり、采配ミスや失策を嘆いたりしているようなものである。ただ私たちは同じファンでも、ファンとしてのプロでありたいとは思っている。

ところが、今回、『バンキシャ』関係者のヒアリングのなかで、BPOや放送倫理検証委員会のことを聞いたことがない、これまでの報告書や意見書も読んだこともない、という話がときどき出てきて、私たちはいささか悲しくなった。とくに若い制作スタッフがそうであった。プロのファンがいなければ、プロのプレーヤーは育たない、と言われるが、どうやら私たちはまだプロのファンとして認知されていないらしい。

あるいは、昨今のきびしい経済環境のもと、彼ら若い制作者たちは目先の仕事にあわただしく追われるばかりで、他の放送局や番組で起きた不祥事や放送倫理の問題についてまで、立ち止まって考える時間と気持ちの余裕がないのかもしれない。それではプロのプレーヤーになれないよ、とプロのファンでありたいと願う私たちとしては、彼らの肩を叩き、ひと言、言っておくべきだろうか。

『バンキシャ』は人気番組のひとつである。しかし、本来、緊密なチームワークで動

いていたはずの放送が、ばらばらの体制で行われていたことが明らかになった。ここにいったん虚偽の、それもかなり意図的な虚偽の情報が入ってきたとき、誰も見抜くことができなかった。素地にあったひび割れは、あっという間に深刻な事態へと広がっていった。

ヒアリングのなかで、幹部スタッフの一人は「番組制作のなかでいっしょに喜びも苦労も分かち合ってきた仲間だからこそ、すべての責任は自分にある」と語った。そこに私たちは、制作スタッフに絶対欠かせないチームワーク再生へと向けた覚悟を読み取りたいと思う。次は、チームオーナーやフロント陣が環境を整え、プレーヤー一人ひとりが奮起する番である。